歴史地震
第26号(2011) 92頁

［講演要旨］文禄五年（1596）伏見地震における京都盆地での被害状況

Damage in the Kyoto-basin due to the 1596 Fushimi Earthquake

東京大学地震研究所　西山昭仁
Akihito Nishiyama（ERI, Univ. of Tokyo）

§ 1. はじめに

文禄五年（1596）の伏見地震は，文禄五年閏七月十三日（グレゴリオ暦：1596 年 9 月 5 日）の子刻（午後 11 時～午前 1 時頃）に発生して，畿内一円に大きな被害を及ぼした内陸地震である．この地震の起震断層について，従来は京都盆地南部～奈良盆地北部の西縁と考えられていたが［大長・山本（1989）］，現在では有馬－高槻構造線に推定されている［宇佐美（2003），寒川（2010）］．

本研究ではこれらの先行研究を踏まえ，最大被災地である伏見や京都など京都盆地での被害状況について，地震被害と都市構造・地盤条件の関係を中心に検討していく．

§ 2. 伏見での被害

伏見は，天正二十年（1592）八月に豊臣秀吉によって隠居所の建設が始められ，それが文禄三年（1594）に伏見指月城へと造り替えられ，城下町が整備されて成立した新都市であった．

2.1 伏見城での被害

山科言経の『言経卿記』によると，伏見城は天守が崩壊しており，義演の『義演准后日記』によると，伏見城の門・御殿などが大破・倒壊したとある．また，壬生孝亮の『孝亮宿禰日次記』によると，伏見城の二之丸では，地震によって女房（侍女）300 余人が死亡したとある．これらのことから，伏見城（伏見指月城）では天守が崩壊し，門や御殿も大破・倒壊して，多数の死者が出た状況がわかる．伏見城内で死者が増加した原因の一つとしては，伏見での明使（文禄の役の講和使節）引見の準備として，通常以上の人々（侍女）が城内の屋敷や小屋などに集め置かれていたことが考えられる．

2.2 向島城での被害

『義演准后日記』によると，向島城では石垣が二間余（約 3.6m）沈下したとある．伏見城の南，宇治川を挟んだ対岸に建設されていた向島城は，地震発生時には完成間近の状態であった．向島城では地震によって石垣が沈下していることから，地盤液状化現象が発生したと考える．

§ 3. 京都での被害

当時の京都市街地は，天正十四年（1586）から始められた秀吉による都市改造によって，新たな街区の整備や旧来の街区の再編成などが実施されていた．

3.1 上京と下京での被害

『言経卿記』によると，京都の上京での被害は軽微であったが，下京の四条町では予想外に被害があり，上京と下京を合わせて 280 余人の死者があったとある．このことから，京都では上京よりも下京での被害程度が大きく，下京では四条町などでの町家の倒壊によって，280 人余の死者が出た様子がわかる．

上京の市街地は，元亀四年（1573）四月の織田信長による上京焼討ちによって，二条通以北が焼き払われており，再建には数年を費やしていた．そのため上京の町家の殆どは，焼討ち以降に建てられたものであり，地震発生時には築後 20 年程度を経過していた．また，当時の下京には，焼討ちで焼亡した上京よりも築年数が長い中世以来の町家が，上京よりも高密度で建ち並ぶという状態が維持されていた．そこへ地震が発生して，古い町家が密集する下京の四条町などの市街地が集中的に被災し，町家の多数倒壊によって大勢の死者が出たと考える．一方で，下京に比べて殆どの町家の築年数が短く，町家の密集度合いが低い上京では，被害は比較的軽微であったと考える．

3.2 方広寺での被害

文禄四年（1595）九月に工事が完了した方広寺については，『言経卿記』によると，大仏殿の被害は軽微であったとあり，『義演准后日記』には，方広寺の三面の築地塀は全て崩壊し，大仏は右手が崩れ落ちて胸部が崩壊したとある．方広寺では地震に弱い建造物が被災したのみであり，全体として被害程度は軽微であった．

§ 4. おわりに

文禄五年の伏見地震は京都盆地において，豊臣秀吉の政策によって建設された新都市である伏見や，大規模な都市改造によって再編成された京都に多大な被害を与えた地震である．この地震では，中世以来の歴史を有する古い建築物が多く被災しているだけではなく，築年数が 10 年にも満たない新しい建築物も多く被災している．その理由として，推定される震源（震央）から比較的近い距離に京都盆地が位置することが考えられる．しかしその一方で，被災した建築物が立地している地盤条件や建築物の個々の特性も，被害程度に大きく影響していると考える．